

### ベートーヴェン：ヴィオラとチェロのための二重奏曲 《2つのオブリガート眼鏡付き》

ユニークな表題を持つこの二重奏曲は、1796年頃の作。親友のニコラウス・ツメスカル（チェロ）とベートーヴェン（ヴィオラ）が、ともに近視で眼鏡をかけていたことに由来する。

第1楽章はソナタ形式のアレグロ。ヴィオラとチェロが互いに旋律を受け渡し、対等に掛け合う。再現部の前にはピチカートと弓奏を交互に繰り返す遊び心のある書法も見られる。第2楽章は優雅なメヌエット。中間部のトリオではカノンのような技法が使われ、突然の転調など意外性が散りばめられている。

### ルトスワフスキ：牧歌集

ヴィトルト・ルトスワフスキは、20世紀ポーランドを代表する作曲家。原曲は1952年に作曲されたピアノ独奏曲で、1962年にヴィオラとチェロのために編曲された。5つの小曲が並んでおり、ピアノの響きを引き写したかのような二重奏を楽しむことができる。

### R.クラーク：ヴィオラとチェロのための2つの小品《子守歌とグロテスク》

レベッカ・クラークは、二度にわたる世界大戦の戦間期に活躍したイギリスのヴィオラ奏者で、作曲家としてはヴィオラを中心とした室内楽を多く残した。あふれんばかりの才能を持ちながらも、ジェンダーの壁の前に苦難の道を強いられた。1916年頃、作曲家としての最初期に書かれた本作は、弱音器を付けて優しく眠りの波間をたゆたうような「子守歌」と、諧謔的な「グロテスク」からなる。

### J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲 第2番

《無伴奏チェロ組曲》（全6曲）が書かれたのは、ケーテン宮廷楽長時代（1717-23）の前期とされる。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジーグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード」を、ジーグの前の第5曲に舞曲（本曲では「メヌエット」）を置く構成になっている。

第2番の「二短調」という調性は、音楽を内省的な方向へ導く。第1曲プレリュードは、和声よりも旋律そのものに重きが置かれている。第2曲の高度な技巧を要するアルマンド、第3曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第4曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なり、憂愁を湛えた表情を見せるサラバンド。第5曲の2つのメヌエットでは、主調の第1メヌエットが二短調、第2メヌエットが二長調となり、古風な響きを醸す。第6曲のフランス風ジーグは、規則正しい8小節の楽節構成による。

### ヒンデミット：二重奏曲断章

1916年に作曲されたヴィオラとチェロのための未完の楽曲。わずか数十小節の短い断章であるが、ヒンデミット初期の情熱的でロマン派的な色彩が感じられる。

### レーガー：無伴奏ヴィオラ組曲 第2番

マックス・レーガーの「無伴奏ヴィオラ組曲 第2番」は、1914年に作曲された3つの組曲の中の1曲。敬愛するバッハの無伴奏作品を手本としながらも、レーガー特有の緻密な対位法とロマン派的な半音階主義が融合しており、演奏には高度な技術を要する。

「第1楽章 *Con moto*」は、快活なテンポで始まり、二声の対位法や重音奏法が多用される。「第2楽章 *Andante*」は、穏やかで瞑想的な雰囲気を持つ緩徐楽章。深みのあるヴィオラの音色を活かした美しい旋律が印象的。「第3楽章 *Allegretto*」は、スケルツォ風の楽章で、軽妙でリズミカルな動きが主体となっている。無窮動風の「第4楽章 *Vivace*」は、急速かつ技巧的なパッセージが連続する。

### T.デメンガ：Duo? o, Du...（デュオ、オ、ドウ？）

作曲者のトーマス・デメンガは、スイス・ベルン出身（1954年生）のチェリスト、作曲家、教育者。本作のオリジナルは、1985年に書かれたチェロの二重奏曲。おもにトーマス&パトリック兄弟により演奏され、不吉なリズムを刻みながら、チェロの低音を活かした独創的かつ実験的な音楽が繰り広げられる。

### モーツアルト：ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲 K.423（ヴィオラ&チェロ版）

K.423（と、K.424）は、1783年、ザルツブルク大司教から作品を依頼されたミヒヤエル・ハイドン（ヨーゼフ・ハイドンの弟）が病床に伏していたため、モーツアルトがゴーストライターとして作曲したとされる。ヴィオラを愛奏したモーツアルトは、当該パートを単なる伴奏に留めず、楽器の特性を存分に活かした内容に仕上げ、本曲に不朽の価値をもたらした。

「第 1 楽章 Allegro」は、力強い序奏に始まり、2 つの楽器が対話しながら展開するソナタ形式。第 2 主題では旋律の跳躍音程が徐々に広がっていく独創的な書法が見られ、モーツアルトらしい知的な遊び心が映える。「第 2 楽章 Adagio」は、美しく叙情的な緩徐楽章。歌うようなヴァイオリンをヴィオラが豊かに支え、時には複雑な装飾音を伴って交錯する。軽快なロンド形式の「第 3 楽章 Rondeau. Allegro」では、舞曲風の躍動感あふれる旋律が繰り返される。卓越した技巧を要する、華やかで快活なフィナーレとなっている。